
星のカービィ ゼロの復讐劇 II - 2 ～戦友～

零物質

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星のカービィ ゼロの復讐劇 I I ー 2 ｝戦友｝

【Nコード】

N 6 5 3 5 I

【作者名】

零物質

【あらすじ】

「星のカービィゼロの復讐劇誕生1周年記念作品」

カービィにはかつて大切な仲間がいた。その仲間や父親がうつっていた「ある写真」に疑問を持ったカービィは、彼のおじ「ティンクルポポ7世」の城へと行く。そこで「大切な仲間」に関する様々な話を聞かされる。そして、その地で再び「あいつ」が降臨する……。

マルクとの決戦（II）から1年3か月前（I から半年前）――

7世「みんなどうしちゃったんだ・・・？」

7世はある男の遺体を目の前に泣き崩れていた。

7世は、その男から託された武器「イカヅチ」を片手に立つ。

メタナイト「カードス！！もうこれ以上は無理だ！！ぐああっ！！」
7世「メタナイト！！」

メタナイトは、敵の剣に右肩を貫かれ、そのまま壁に押し付けられた。

その様子を横で見ていた7世にも刃が降りかかる。

7世「ザン・・・あんたの意思・・・俺とみんなで受け継ぐよ・・・！！」

7世はフォーティーンランスと「イカヅチ」を持って大軍に立ち向かうのだった。

それから幾月も流れ・・・

ゴーガシャカービィ&ゴーガシャシャドーカービィ「必殺・「ダブルフューチャークラッシュ」!!!!」
チュガガガアーツ!!!!

マルク「グギャアーツ!!!!し・に・た・く・な・い・の・サアアアーツ!!!!」

バアアアーツ!!!!

2人の英雄はマルクを見事倒し、ゼロの復活からも遠ざけることに成功したのだ。

それとともにあのギヤラクティックノヴァも再び永い眠りについた。2人の英雄はそれぞれ帰るべき場所に帰って行った。

再び平和が戻った。その平和はいつもの平和だった。あきれ返るような、平和なププランドが戻ってきたのだ。

しかし、そんな平和もつかの間だった。カービィに再び悪夢が襲いかかる。

それは、あの決戦から1週間が過ぎた時のことである・・・。

——「星のカービィ ゼロの復讐劇」誕生1周年記念作品——

星のカービィ ゼロの復讐劇ⅠⅠ—2 ｝戦友｝

序章「写真　く謎の一枚く」

カービィ達は今日もデデデ城のパラワドの部屋でのんびりと過ごしていた。

デデデ「ふぁくくく今日もなんかとっても眠いZOYくくく。」

パラワド「しょうがないッスよ。平和なんスから。んじゃ、早速外にくくく。」

ドンッ

パラワド「アヒヤーツ!!」

パラワドの真後ろからカービィがぶつかってきた。

でもカービィはそのまま素通りくくく。

パラワド「な、なんなんスかくく!! 謝りもしないなんてひどいッスよくくく。」

カービィは知らんぷりのまま、目の前の本棚の前に立つ。

カービィ「くくくねえ、ワドルディ。」

パラワド「な、なんスか?」

カービィ「これって何?」

パラワド「え?」

パラワドは座っていた場から離れてカービィの所へ行く。

パラワド「んで、どれッスか?」

カービィ「ええっと、これこれこれ。」

パラワドは、せまい隙間から顔をのぞかす。

パラワド「ええっと……。……！？ちょ、え、大王様あゝ！
」

デデデ「ああん？なんZOY？」

デデデは半分寝ている状態で、猫背のままゆっくりと近づいて見る。

デデデ「んんん……。ん！？」

デデデの目が急に冴えて、猫背の姿勢もピシとなった。

カービィ「……。ええっと、どうしたの？」

デデデ「……。まあいいか……。もう勝手に見とけZOY。」

カービィ「……。？」

カービィは首をかしげて、デデデから本をもらう。

カービィは早速その場に座って本を開く。

その本は……

カービィ「……。あら……。これ……。アルバム？全部僕の小さい
頃の写真だ……。」

カービィはますます不思議がり、どんどんページをめくる。

デデデは真横で汗をかいていた。冷汗のようだ。

そして、デデデが恐れていた問題のページを開く。

カービィ「……。ザン……。？……。え……。父さん……。！？」

カービィはその写真を見た瞬間、体が硬直する。

その写真は、大量の軍隊に囲まれている「ザン」と7世、メタナイトだった。

そして写真の端に、「6世」が倒れている姿が・・・。

カービィの表情がこわばる。

カービィ「え・・・デデデ・・・。」

パラワド「・・・。」

デデデ「・・・。」

カービィ「・・・。。。。。。おい・・・。。。」

その場に残ったのは沈黙のみ・・・。

その空気が何秒か続く。

カービィ「・・・。」

デデデ「・・・。」

カービィ「・・・この写真、何・・・？」

カービィが写真を見せようとする・・・。

デデデ「やめろ、思い出してしまうだろ・・・。」

デデデは涙目で訴えた。

カービィ「・・・何があったの・・・？」

カービィがそう問いだすとデデデは突然その場から立つ。

デデデ「やめろ！！・・・これ以上苦しめないでくれZOY・・・。」

デデデの目にはさっきよりも涙がたまっていた。

カービィはただデデデの様子を見ているだけだった。

デデデ「・・・ワドルディ、行くぞ。」

パラワド「あ、はい・・・。」

パラワドはおどおどした状態でデデデの後ろをついていく。

デデデは部屋のドアを激しく閉めた。

部屋中に大きな音が響き渡る。

そして静かになった・・・。

ポツンと取り残されたカービィは頭を抱えた。

カービィ「・・・これは・・・いたい・・・?」

カービィはその写真を見つめるだけであつた・・・。

第1章「疑問　く7世との対談く」

じつとしていて30分――

カービィ「・・・ずっと見ていてもわかんないな・・・。わかるはずもないしね・・・。」

カービィはやつとその場から立ち、自分の携帯電話から「ある人」にかける。

プルプルプル・・・ガチャ

???「もしもし？」

カービィ「あ、おじか？」

カービィがかけた相手は「ティンクルポポ7世」であった。

7世「ああ、カービィ……。……。カービィ????」

カービィ「どうしたの？」

7世「あ、ああ……。」

カービィも7世も眉をひそめる。

7世「……。んで、用件は何だ？」

カービィ「あ、そうそうそう。この写真のことなんだけど……。」

電話で話しているのに「この写真」とか言われても見えるはずがない。

7世「……。何の話だ？」

カービィ「いやだからこの写真……。」

7世「いやだから……。 (見えないって……。馬鹿なのだろうか?)」

7世は呆れてものが言えなかった……。。

カービィ「……。直接行ったほうがいい？」

7世「場所を知らないだろう？」

カービィ「え、知ってるけど？」

7世「オレンジオーシャンの「新九条通り」 「海沿い109番」だ。」

カービィはそれを聞いた途端に頭が混乱した。

カービィ「え、いつ引っ越したの？」

7世「1年くらい前だ。」

カービィ「え、1年前……。……。1年前？」

カービィは何度頭の中を考えても1年前のことが思い出せない。

7世「……。どうした？」

カービィ「え、あ、いや、1年前のことが思い出せなくてね……。」

7世「それも当然だ……。……。ああ……。」

7世は突然声が小さくなった。

カービィ「……。おい……。」

7世「……。あ、ああ、すまんすまん。で、最終的に用件は？」

カービィ「この写真は一体何なのかっていう話。」

7世「さっきも言ったが、こっちに直接持ってきてくれ。場所は……さっき言ったからわかるな？」

カービィ「一応……。」

7世「というわけだ。では。」

ガチャッ

そこで通話は途絶えた。

カービィは携帯を閉じる。

カービィ「……。さて、行きますか……。」

カービィはその部屋から立ち去り、10分後にデデデ城から外に出

る。

カービィ「……んじゃ、ワープスターで行きますか、と。」

カービィは口笛を鳴らし、ワープスターを呼び寄せた。

カービィはワープスターに乗り、そのままオレンジオーシャンへと向かった。

（オレンジオーシャン）

カービィがたどり着いたのは、世界一と言っていいほど夕焼けの似合う美しい海「オレンジオーシャン」。

かつてこの地に「銀河連邦第8支部」があった地としても有名である。

この地で1年3か月前、あの戦いが行われたことでも有名だ……。

カービィはここ「オレンジオーシャン」でさっそくティンクル城を探す。

カービィ「ええっと、確か場所は……。」

20分後――

カービィ「ええっと……ここ、だよね……？」

カービィはとりあえずチャイムを鳴らす。

しばらくすると向こうから誰かが向こうから降りてきて城門を開けた。

その「誰か」とはもちろん……

ギイイイ・・・

7世「おお、カービィ。久しぶりだな。」

カービィ「おお、おじ！！久しぶりだな、ホントに。いやあ、何か月ぶりだろう？」

7世「1年・・・3か月ぶりだな。」

7世は険しい表情で発言する。

カービィ「よく覚えてたね・・・なんで？」

7世「・・・覚えてるさ・・・。あの戦いがあつた月だから・・・。」

7世は頭をなぜか抱える。

カービィ「・・・本当にどうしたの？・・・。」

7世「・・・まあいい。んじゃあ中に入れ。」

カービィ「あ、ああ・・・。」

カービィの眉もだんだん傾いていく。

（第4応接室）

カービィは7世と一緒に部屋の中へと入った。

カービィ「へえ、新しい城も結構立派だね。」

7世「立てる費用ならいくらでもある。」

カービィ「・・・。」

7世「・・・。」

しばらく静かになる。

そのまま10秒・・・20秒・・・。

カービィ「・・・・。」

7世「・・・・。」

カービィ「・・・・。」

この空気の中、最初に切りだしたのは・・・

カービィ「・・・・本題に入ろうか？」

7世「・・・・そ、そうだな・・・・。まずはソファに座って・・・・。」

7世はカービィを座らせ、自分もそのあとに座る。

カービィは早速写真を取り出す。

カービィ「はい、これだけど・・・・。」

7世「お・・・・？それか？」

カービィ「一応・・・・。」

7世「ええっと・・・・。」

カービィは7世に写真を渡し、7世に見てもらうことに。

7世は早速写真を見る。

その瞬間体が固まり、目も完全に見開く。

7世「あ・・・・あ・・・・。」

カービィ「・・・・。・・・・。」

カービィはとても心配そうに7世の表情を見る。

7世（なんでこの写真をカービィが・・・？）
カービィ「・・・おじ・・・？ねえ・・・え・・・？」

ずっと無言の7世に何度か声をかけるカービィ。

帰ってくるのは沈黙のみ・・・。

7世はまだ考えていた。

7世（カービィに話せば・・・。。。。ただじゃすまないだろうな・
・・・。）

カービィ「おじ！！ちょ・・・え・・・おい！」

7世（・・・話してみるか・・・。うん、話そう・・・。）

7世は写真をテーブルの上にゆっくりと置き、カービィの方に目を向ける。

7世「・・・。」

カービィ「おじ・・・。」

ここでついに話が始まる・・・。

7世「・・・まず、この写真から何を聞きたい？」

カービィ「この写真は何なの？」

即答で答えた。

7世は迷いもなく打ち明ける。

7世「1年3か月前、ここには前まで「銀河連邦第8支部」があった。」

カービィ「ぎ、ぎんがれん・・・？んで・・・？」

7世「その第8支部付近で、あの「ペンギン」の部下らと戦った。」
7世「私らは一生懸命支部を守った。だが……。」

7世は顔を下に向け、目をつぶった。

カービィ「……。」

7世「カービィがその時どうなっていたか知っているか？」

カービィ「え……いや、知らないよ……。」

カービィは7世の質問に動揺する。

7世「……カービィは……デデデ城の研究施設の中で眠ってたんだ、ずっと……。」

カービィ「……へ……？」

カービィの口がぽかんとあき、頭が真っ白になった。

7世「いまから……1年……9か月前か。」

7世「あんたがさらわれたんだ。デデデらが「研究材料」と称してあんたを誘拐したんだよ。」

カービィ「……。」

7世「あの後、私らに内緒でザンが単独で……デデデ城に突入したんだ……。」

7世は深いため息をつく。

7世「予想した通りに捕まった。しかも「ついでだ」とか言ってザンまでカプセルの中に入れられたんだ……。」

7世「私らは怒りに震えた。だが……救いようがなかった。」

7世は頭を抱える。

それを見てカービィが問う。

カービィ「・・・なんで救いようが・・・なかったの・・・!?」

7世「あんな嚴重体制じゃ突入しようがないだろう? しかも相手は城だ。・・・はあ・・・。」

カービィ「・・・続き・・・聞かせてよ・・・。」

カービィは真剣な眼付をして、そう7世に言う。

7世「それから半年近くも過ぎた。ザンが、目覚めたらしいんだ。」

カービィ「え・・・ザンが・・・?」

7世「ザンは警備員を振り切ってなんとが脱出した。まだ意識のないカービィを抱きかかえて・・・。」

カービィ「・・・。」

カービィは目を押さえる。

7世「そのザンが急にティンクル城に押し掛けてきた。あとから追ってきた軍隊と一緒に・・・。」

7世「相手が要求しているのは「カービィとザンオーバーの身柄をよこせ」ということだった。」

7世「私たちはもちろん戦ったが到底かなうはずもなかった。だから真っ先に城から逃げた。おかげで城は灰になった・・・。」

カービィ「それで引っ越し・・・。」

カービィはだんだん気まずい顔になる・・・。

7世「私たちはデデデの軍隊にどんどん追い詰められた。」

7世「銀河連邦第8支部にまで来た頃には8万にもなっていた・・・

。」

7世「私たちは少ない人数ながらも戦った。だがその戦いで2人もの犠牲者を出してしまった……。」

カービィ「その2人って……まさか……。」

カービィの目が血走る。

7世「兄さんと……ザンだ……。」

カービィ「……。……。……。!？」

カービィの呼吸が激しくなる。

7世「メタナイトも右肩を貫かれて重傷さ……。一方の私も頭をやられて意識不明になったよ。」

7世「メタナイトと私とカービィはそのままデデ城に連れて行かれて、銀河連邦第8支部もいつの間にか落とされた……。」

7世「そのまま5ヶ月ぐらいたった……。」

カービィ「ゼロの襲撃の1か月前……。か？」

7世「私とメタナイトは永い眠りから覚め、解放の許可が出て久しぶりに外の空気を吸うこととなった。」

7世「だがカービィはまだ解放の許可が出なかった……。それ以来ずっとカービィと会っていないのだ……。」

カービィ「んじゃあ……。僕は一体……。!？」

7世「それに関しては私もわからない。ああ、わからない。」

両者共々とても疑問に感じていた。

カービィの「謎の1か月」はいったいどのようなものだったのか……。
・？

7世「その話はいったん置いとくぞ。」

カービィ「……。」

7世「……さっきの話でもうわかったと思うが、この写真はその戦いの途中のものだ。」

カービィ「でも、この写真は……誰が……撮ったの？」

7世「……言われてみれば確かにそうだな……ああ。」

カービィ「……。」

7世「……。」

再び空気は沈黙にかわる。

カービィ「……。」

7世「……。」

カービィ「……ザンは……ザンオーバーは……本当に死んだの……？」

7世「……私の目の前で……死んで逝った……。」

カービィ「父さんも……？」

7世「……もうこれ以上……言わないでほしい……。」

7世の目から涙がこぼれおちていた……。

7世はソファから立ち上がって、そのまま退室した。

カービィ「おじ……。」

カービィは、7世が退室するまでずっと背中を見続けていた……。

カービィもその場から立つ。

カービィ「……そろそろ……この城から出ますかな……。」

カービィは背伸びをし、し終わったところでその部屋から立ち去っ

た。

カービィは7世に何も言わず、そのまま城から出て行った。

第2章 「予感　　魂の復活」

カービィはワープスターに乗り、早速出発した。

カービィ「……。あれだけじゃ納得いかない……。もっと絞り出さなくちゃ……。」

そう思っている中、カービィは空を見上げる。

その空に、1点の紫の光が光っていた。

キラーン……

カービィ「……。？なんだ、あれは……。？」

カービィはしばらく見続ける。

その時、その紫の光に何かが集まり始めた！！

カービィ「な、なんだ、あれは！？」

カービィは仰天し、捜査をストップした。

その光はどんどん形をかえ、そして、見覚えのある形となる……。

カービィ「あ……。あれは……。マ……。ルク……。！？」

カービィがそういった瞬間、マルクラしき光から黒い雲が大量に出

てきたのだ!!

その雲は空全体を覆い、暗黒の世界に引きずり込んだのだ。
雲は雷をとどろかせ、カービィ達に恐怖を与える。

カービィ「・・・。なんだ・・・、あれは・・・？」

しばらくして黒い雲に穴ができた。

その穴は時間がたつにつれて大きくなり、穴の向こうから紫の光が
さす。

カービィは息をのんだ。

カービィ「・・・。」

そして、その穴から3つの突然光の矢が降ってきた!!

ザアアアアーツ!!

カービィ「・・・!？」

その矢は勢い良く海に落ち、その海が音を出して叫びだす。

カービィ「・・・!？」

カービィは立ち止まるだけで一向に動かない。

そして、ついにあの穴から「あいつ」が現れる・・・!!

ゴゴゴゴゴゴゴ・・・

カービィ「・・・!!!？」

????「クキカカカ・・・。」

カービィ「・・・マルク・・・なのか・・・？」

カービィは一度目をこする。

カービィ「ああ……。マルクだ……。でも、前のマルクじゃない……。！」

そう、カービィが見たマルクは以前のマルクではない……。

——マルクソウルだ。

マルクソウル「キギヤアアーツ!!」

キィィーンッ

カービィ「ぐおお、み、耳が……。！」

カービィに耳があるのかは知らないが、カービィは耳と思われる場所をふさぐ。

そんな中、真後ろから突然「あの人」が……。

???「何の騒ぎだ？」

カービィ「お、おじ!!」

カービィに話しかけたのは、さっきまで対談をしていたあの「7世」だったのだ。

カービィ「お、おじ、あれは……。！」

7世「マルク……。いや……。」「マルクソウル」とでも言おうかな？」

カービィ「マ、マルク……。ソウル?ん？」

7世「この宇宙で生きるすべての生物は、死後に3つに分裂するんだ。」

カービィ（こんな状況なのになんでノロノロと説明しようとするんだ……。?。）

そう思いながらもとりあえず聞くカービィ。

7世「ひとつは心。いわゆる「心霊体」だ。」

カービィ「ああ。で？」

7世「もうひとつは残留思念。いわゆる「思念体」だ。」

カービィ「おお。んで？」

7世「最後の一つが・・・魂だ。それは「未鎮魂体」と言われている。」

7世はまずその説明をし終え、そして次に「目の前の敵」について説明する。

7世「あいつ、カービィのいつていた「マルク」ってやつだろう？」

カービィ「ああ、そうだが？」

7世「あいつの場合、あれは魂だ。しかも何かを取り込んでいる。」

カービィ「おじ、見るだけでそんなにわかるもんなの？」

7世「30年以上戦い続けているのにわからなくてどうする？」

カービィ「そ、それもそうだがね・・・（さっさと話し終わってくれよ！！）。」

カービィがそう思っているうちに、ずっと向こうにいるマルクソウルはどんどんゆっくりと降りてくる。

自分の身を羽根で丸く包み、ゆっくりと海上に、降りてくる・・・

ゴゴゴゴ・・・

カービィ（早くしてくれないかなあ・・・？）

7世「何を取り込んでいるかはわからないが、あれが魂なのは確かだ。魂が実体化する奴などあまり聞いたことがない・・・。」

7世「あの様子だと、「残留思念」も「心」も消滅したな・・・？」

カービィ「……そろそろあいつをどうにかした方がいいんじゃない……？」

7世「ええ？」

カービィにつられて目の前を見る7世。

その視線の先には、海の真上に「あいつ」が浮いていた。

マルクソウル「クカコココココ・・・」

マルクソウルはゆつくりと翼を広げ・・・。

マルクソウル「ズカアアアアアーッ!!!!」

ゴ
ア
ア
ア
ー
ツ

カービィ「おあああ……！！」

7世「耳が痛い……!!」

マルクソウルは相当大きい音波を発生し、周辺のみんなを苦しませた。

カービー「……今からいったい何をやるうとしているんだ、マルクスウルは……!？」

7世 「わからないな。考えられることとすれば・・・」 「記憶の回収」

カービィ「記憶の回収? え?」

7世「魂は主に生物の記憶をエネルギーとする。もしかしたらその可能性が……」

ド
オ
ー
ン
ツ

カービィ「ああーっ!!」

7世が説明しているうちに向こうから突然攻撃され、カービイらは一瞬にして吹っ飛ばされた。

7世「ぐ……。」

カービィ「どうやら、前のマルクみたいには喋れないようだね。」
マルクソウル「クキコアアアッ!!」

7世「……戦うのか……?」

カービィ「目的がなんだろうと、戦うしかないでしょ……?」「記憶の回収」……回収したらその人は……?」

7世「もちろん記憶喪失。立つことまで忘れるのだ。頭が根の根からリセットされるんだよ。」

カービィ「……やってやるよ……!!」

7世「……気をつけろよ。」

カービィ「ああ……。」

そして……、戦いはついに……はじまった……!!

第3章 「死闘　く心なき存在との決戦」

マルクソウルは100mほど先にいる。

カービィは正面に向く……。

この戦いで最初に動いたのはカービィだった。

カービィ「行くぞ……。」

ボアアッ

ダブルソードカービィ「ダブルソードカービィ……。」

カービィは、二刀流の「ダブルソードカービィ」となった。

カービィはその場から素早く真正面人飛び、瞬く間にマルクソウル

のところに。

だが、油断は大敵である。

マルクソウルは突然真っ二つになり、カービィの攻撃をよけたのだ（カービィが真っ二つにしたわけではない）。

ザパッ

ダブルソードカービィ「ぐおっ!？」

カービィがそのまま間を通過したその時、マルクソウルの体と体の間からブラックホールが発生したのだ!!

マルクソウルはそのまま消え、ブラックホールの魔の手がカービィに襲いかかる!!

シュゴオオオーツ

ダブルソードカービィ「うおお!？んじゃあ・・・。」

ジェットカービィ「ジェットカービィ!!ふぬおおおあ!!」

ゴオオオーツ

ジェットカービィは最大出力でブラックホールから逃れようとするが、徐々に吸い込まれていく。

抜けたところで、下は海だ。カービィ、開始早々から絶体絶命のピンチか？

とその時、真後ろからあの声が・・・!!

???「ジェネシスロック。」

バアーン

ジェットカービィ「え?」

ブラックホールに4つの紫の岩がすっぽりと入り、ブラックホールは完全に消滅した。

それに仰天してカービィは後ろを振り向く。

スパークストーンシャドーカービィ「久し振りだな。」

ジェットカービィ「おお、シャドー!!!・・とか言ってる場合じゃねえぞ?」

そういったとたん、真後ろからブラックホールが!!

シャドーカービィは一瞬にして吸い込まれていった・・・。

ゴオオオーツ

スパークストーンシャドーカービィ「あああああーっ!!」
スポンツ

ジェットカービィ「何をしに現れたんだ、あいつは・・・。」

そう呆れていると、突然周囲が紫の空間に・・・。

シュオオオンツ

ジェットカービィ「えっ!?!」

カービィの足元に虹色のクリスタルがたくさん散りばめられ、目の前に大きな大きな銀河が広がる・・・。

ジェットカービィ「こ、ここはどこだ・・・!?!」

カービィはコピー能力を解除し、周囲を警戒する。

カービィ「・・・・・・。」

その瞬間、クリスタルが突然割れてその中からマルクソウルが出現した!!

マルクソウル「クケケケケケ!!」

カービィ「マルク・・・ソウル・・・!!」

カービィは呼吸が激しくなった。

それとともに心拍数も上がり始め、緊張がマックスに。

マルクソウル「キカアーツ!!」

カービィ「なっ・・・!?」

マルクソウルは突然あの「カッター」を16連射してきたのだ!!

シュシュシュツ

カービィ「なんだよ、突然!!」

ダブルソードカービィ「ダブルソードカービィ!!」

カービィは2つの剣で素早くカッターをめったぎる。

その直後、向こうから突然「破壊光線」が!!!

マルクソウル「キキャオオオーツ!!」

ドッキャアアアンツ!!!!

ダブルソードカービィ「だ・か・らぁーっ!!」

カービィは素早く横によけ、そのまま直行でマルクソウルのもとへと跳ぶ。

ダブルソードカービィ「いくぞ、八つ裂き斬り改!!」

カービィは2つの剣でもものすごい速さで斬りかかった!!
だがその場所にはマルクソウルはいなかった・・・。

そして、いつの間にか真後ろにマルクソウルが・・・!!

マルクソウル「クカカ・・・。」
ダブルソードカービィ「・・・!？」

カービィは気づいて後ろを向くが、もう遅かった・・・。
マルクソウルは口からあの「破壊光線」を出し、カービィに直接ぶち当たる・・・。

ドオオオンッ!!!

カービィ「なあ、ズガアアアッ!!」
バァーンッ!!

カービィは勢い良く呼ばされ、クリスタルに思いきりぶつかる。
そのクリスタルが割れ、カービィはそのまま突き抜ける。
そして次のクリスタルにぶつかり、ようやく止まった。

シュオオオ・・・

カービィ「あ・・・ああ・・・くおお・・・。」

カービィは腕をプルプル震わせながらもなんとか立つ。

カービィ「く・・・ぬああ・・・。」

全身怪我をしているカービィに勝機はあるのか・・・？

カービィの意識がもうろうとしている中で、再びあいつが・・・。

マルクソウル「キガシャアッ!!」
カービィ「・・・え・・・?」

マルクソウルは、あの光の矢をカービィに向かって大量に放った！！
カービィは全身に刺さり、再び吹き飛ぶ。

カービィはクリスタルにたたきつけられ、もう力は残っていない。
まだ全身に矢が刺さっているが、抜く力もない。

カービィの意識はもうろうとしていた。

カービィ「あ．．．お．．．。うあ．．．。」

カービィがずっと寝たきりでいると、空から絵具の雨が降ってきた
！！

カービィ「．．．あ．．．？」

その雨はカービィの体をさまざまな色に染め、じわじわとダメージ
を与えていく．．．。

カービィは一体どうなってしまうのだろうか．．．！？

カービィ「．．．．。」

マルクソウル「クコカアアーツ！！」

その時、カービィの周辺が真っ暗になる。

ブオンツ

カービィ「ああ．．．？な．．．。．．．？」

カービィの意識がほとんど薄れている中、再び変化したステージ。
これは一体何なのだろうか．．．？

???「．．．久し振りだな、カービィ。」

カービィ「．．．！？ザン．．．！？」

カービィの目の前に現れたのは、7世との対談で何度も出てきた「オーブ・ザンオーバー」であった。

ザン「何で寝てるんだ？ほら、起きろ。」

カービィ「あ、ああ……。」

カービィは、ザンに腕を引っ張られて起き上がり、その場に座る。

ザン「あんただけを取り残して悪かったな……。」

カービィ「な、なんで……ザンがここに……。」

ザン「さあ、なんでだろうな。」

ザンは一度上を見て、そのあとにもう一度カービィの顔を見る。

カービィ「話は聞かせて……もらったよ……。なんで僕まで連れ出したの……？」

ザン「あんたと一緒に生きて帰りがかった……。その思いであんたと一緒に出たんだ。」

カービィ「でも……死ぬことないじゃん……。」

カービィは涙を必死にこらえる。

カービィ「……なんで教えて……。くれないの……。？突然のことでだから呆然となって、それで……。」

ザン「……あんた今戦ってるんだろ？そんな状況じゃあ教えられんな。」

カービィ「……。」

ザン「……俺もさ、いるんだからさ、気にせず行ってこいよ。な？」

カービィ「……。」

こらえていた涙があふれ出す。

ザン「……最後に……。……おれのこと、ずっと覚えていてくれるよな……?」

カービィ「ああ……。もちろんさ……。これからもずっと……。」

ザン「そうか……。ありがとな……。……。カービィ、んじゃ、行ってこい。」

カービィ「絶対に……。勝ってみせるさ……。」

ザン「……。じゃあな。」

ザンがそう言って手を振ると、目の前が再び戦場となった。

カービィの体から怪我が消え、右手から突然「あの武器」が登場する。

シュウウ・・シュンツ

???カービィ「こ、これって……。ザンの武器じゃ……。!?」

そう、カービィの持っていた武器とは、「ザン」がかつて使用していた「イカヅチ」であつたのだ。

※イカヅチとは……。巨大なハンマーに大きな斧がついたような武器

カービィはそれをひっさげて、マルクソウルを目の前にする。

マルクソウル「クキヤアアアーツ!!!」

イカヅチカービィ「……。さて、やりますかな、と。」

再び戦闘が始まる！！

第4章 「英雄　く形見を片手にく」

マルクソウルからの攻撃で戦闘が始まった。

マルクソウルはあの「光の矢」を大量に真上から降らす。

マルクソウル「キイイイーッ！！」

ザアアアッ

カービィはすぐさま真上に飛び立ち、上空にいるマルクソウルへと向かいながら光の矢をイカツチでどんどんたたき落とす。

イカツチカービィ「ほあああーっ！！」

ガンガガンガガンガン

カービィはすべての光の矢を打ち落とし、ついにマルクソウルへと向かう。

カービィはイカツチを振り回して勢いをつけ、マルクソウルに全力で攻撃した。

イカツチカービィ「ヤアアアアッ！！」

ビューーン

マルクソウル「クキキヤキヤキヤキヤ！！」

マルクソウルは事前にバリアをしていたのだ。

カービィはその勢いで跳ね飛ばされ、地面に落ちていくが、落ちる

直前に「ある攻撃」を仕掛けた。

イカヅチカービィ「・・・どうやら魔法が使えるみたいだ・・・。
よし、「ファイガ」！！」

カービィは炎系魔法「ファイガ」を使用し、マルクソウルに向けて
攻撃した！

丸裸だったマルクソウルは見事にその攻撃があたり、マルクソウル
もそこから落ちていく。

カービィはクリスタルの上に着地し、マルクソウルの落ちていく様
子を見る。

と次の瞬間、マルクソウルが突然体が「赤と青」の半分半分になっ
た！

マルクソウル「グクキ・・・クココ・・・キカカカカカカ！クガ
アアアアアーツ！！」

マルクソウルはそのまま体が2つに裂けて2つの玉「デッドリーボ
ール」になり、片一方は「赤の玉」、もう一方は「青の玉」となっ
たのだ。

カービィはそのことに仰天する。

イカヅチカービィ「あ・・・んな・・・え・・・！？」

2つのデッドリーボールはそれぞれ別ルートからカービィを狙って
きた！！

ゴゴゴゴゴ・・・

イカヅチカービィ「・・・まったく何なんですか！！」

イカヅチカービィはクリスタルから跳び、2つの玉から避ける。
そのデッドリーボールはカーブして、カービィを追う。
早速「青」のデッドリーボールがカービィを襲う！

ゴアアアッ

イカヅチカービィ「ぐおっ、この、ほりゃっ!!」
バアーン、ガンッ、ストオッ

カービィは横スイングと縦スイングをリズムカルにたたき繰り返すが、青のデッドリーボールがあちこちカービィの周りを動き回って振り回してたたくのにかなり苦労する。
さらに、もう一方の「赤」のデッドボールもやってきたのだ!!
突然のことにカービィはとても戸惑う。

イカヅチカービィ「2つも・・・相手・・・できないぞぉっ!! ああぁーっ!!」

カービィは青のデッドリーボールを利用して再び上へと逃げる。
2つのデッドリーボールはカービィが飛んだ方向へと向かう。

カービィは、ちょうど上にクリスタルがあったのでその上に着地する。
カービィは下の様子を見る。

イカヅチカービィ「・・・まだ追ってるのか・・・。」

そう言うとカービィは突然イカヅチを振り回し始めた。
ぐるぐる振り回すうちに炎が・・・。
そして・・・。

イカヅチカービィ「行くぞ!!」「究極極意瞬殺イカヅチ投げ」!!
!どりゃあああーっ!!」
ボアアアッ

カービィは、イカヅチをスイングして勢いづけたところで投げる「究極極意瞬殺イカヅチ投げ」をした!!

そのイカヅチはそのまま「赤」のデッドリーボールへと向かう。

そして、イカヅチが赤のデッドリーボールに勢いよく奥まで刺さったのだ!!

炎も出ていたので引火し、そのまま赤のデッドリーボールが落ちていく。

その先には「青」のデッドリーボールがいたのだ!!

そして、「赤」と「青」のデッドリーボールが衝突し、勢いよく大爆発をした!!!!

ピカアンッ

ドッキヤアアアンッ!!

ズガアアアンッ!!!!

爆風の関係でカービィの所までイカヅチが飛んできた。

カービィはイカヅチを受け取り、下を見る。

イカヅチカービィ「・・・これでマルクソウルも・・・。」

そういった次の瞬間、爆風の煙の中から突然高速で何かが飛んできた!!

シュオッ

イカヅチカービィ「な・・・!!!」?

マルクソウル「キエツキヤツキヤツキヤッ!」

イカヅチカービィ「マルク・・・ソウル・・・!!!!!!」

カービィは仰天するが、こっちにものすごいスピードでやってくるマルクソウルを相手にして考える暇はない――
カービィは思い切ってイカヅチを縦に思いっきり振った。

イカヅチカービィ「ウオオオーッ!!」

スパンッ――

イカヅチカービィ「・・・え・・・?」

ジジジッ・・・

カービィの目の前にマルクがない――

カービィは後ろを見る。

その視線の先には、真っ二つになったマルクソウルがそのまま前へと進む後ろ姿があった。

マルクソウル「クカ・・・クキカ・・・クコカ・・・ケカ・・・。」

真っ二つになった体はそれぞれクリスタルへと勢いよく突っ込み、そして――

ピッキヤアアアンッ

マルクソウル「キギヤアアアーッ!!!!!!」

ドッキヤアアアンッ!!!!!!

ズガアアアンッ!!

カービィは死闘の末、ついにマルクソウルを倒したのだ・・・!!
カービィは目の前でマルクが爆発し、呆然とする。

イカヅチカービィ「・・・僕は・・・。」

イカツチカービィ「・・・そうだ・・・僕は今、マルクソウルを・・・倒したんだ・・・。」

カービィはその場で崩れこむ。

カービィは自分が今持っているイカツチを見る。

カービィ「・・・ありがとな・・・ザン・・・。」

その言葉に反応したのか、カービィの頭に「誰かからの一言」がよぎる。

ザン「・・・がんばれよ、未来の英雄。俺、応援してるからな、ずっと——」

カービィ「・・・ザン・・・？」

カービィは一度立ち、周りを見渡すが誰もいない。

カービィは再びイカツチを見て、さっきの言葉に返事をする。

カービィ「ザン・・・僕、頑張るよ、ザンの分まで頑張るよ。今までやってきた以上に、これから——」

カービィは目をつぶり、しばらくしてから目を開くといつのまにかティンクル城付近にある崖の上に立っていた。

カービィはイカツチの柄を地面にさす。

カービィは、きれいな夕日を目の前にしてザンに感謝する。

カービィ「ザン・・・ありがと・・・。」

エピローグ「旧友　　小さい恩返し」

あの戦いは一体何だったのだろうか――

そう思わせるように訪れた新たな平和。

カービィは今その平和を感じ、デデデ城へと帰っていく。

あの武器を片手に……。

カービィ「――。」

7世「――。……。――??」

カービィ「ああ、あの空間の中で確かにあったんだ、ザンと……。」

7世「ばかな……。そんなはずがない。……まさか、まだ分散されてないのか、3つに……。」

カービィ「え……。心と思念と魂にまだわかれてないと……?」

7世「ああ。まだ説明してなかったからちょっと説明を。」

カービィ「あ、ああ……。」

彼らはオレンジオーシャンの海辺を背に一度とまる。

7世「死んだ後に体から分離されるものは、最初は「魂」というものののだ。」

7世「その魂には、「感情」「心」「魂」「記憶」「思念」が詰まっている。」

カービィ「ほお……。まて、なんで5つもあるんだ? 3つのはずじゃ?」

7世「ああ。「記憶」のほうは「心」に吸収され、感情の方は「心」と「思念」に半分ずつ吸収されたのだ。」

カービィ「ほお……。最初の話に戻るが、ザンは……分散されてない……?」

7世「ああ。でも・・・あれからもう1年以上も・・・。」

7世は、再び前へと歩き出す。

カービィもそれを見て前へと進む。

カービィ「・・・それで思ったんだけど、ザンの墓って・・・ある？」

7世「言われてみればそうだなあ・・・。ないなあ・・・。」

カービィ「・・・作るか？」

7世「・・・やるか。」

30分後――

カービィ「・・・ふう、とりあえずこれで・・・。」

7世「すまん、あんたの武器を墓代わりにして・・・。」

彼らはティンクル城付近の丘の上にザンの武器「イカヅチ」の柄をさし、それを墓にしたのだ。

カービィ「ザン・・・喜んでくれるかな？」

7世「さあな・・・。でも、これでたぶんあいつにも恩返しができると思う・・・。」

カービィ「え・・・？」

7世「ああ、いろいろとあいつに恩がいっぱいあったんだよ、あんただって恩があるだろう？」

カービィ「一応・・・ね・・・。」

カービィは夕日を見つめる。

カービィ「・・・ザンはこんなきれいな夕日見たことあるのかな？」

7世「さあな……。毎日連邦の関係で忙しかったからなあ……」
カービィ「……。ザンはこれを見たらどんな風に思うんだろな……」
7世「さあ……。」

そこはきれいな夕日ときれいな海に見える
そこには静けさを物語るかのような冷たい風がふいていた。

カービィ「ザン……。もしかして今夕日を見てるのかな……。？」
7世「……。どうだろうな……。見てるんじゃないのか？」
カービィ「……。？」

彼らは「墓」を背に向ける。

7世「……。んじゃあ、そろそろデデデ城に行けよ。あんただけで、行ってこい。」

カービィ「え……。叔父はいかないの？」

7世「私はここに残る。行ったらいろいろと面倒だから……。？」
カービィ「ああ……。わかった。そういえばワープスターがあったな……。それで帰るか。」

7世「んじゃ、元気だな。また機会ができたらかつちにまた……。？」
カービィ「もちろん行くさ。」

7世「カービィ……。？」

カービィ「んじゃ……。おじ、さよなら!!！」

カービィは明いっぱい7世に手を振り、ワープスターに乗ってデデデ城へと向かった。

ザン「カービィ……。がんばれよ。」

ザンは夕日を背景にそう眩き、光の中へと消えていった。
まるで、どこかに導かれるかのように――

完。

(後書き)

こんにちは、零物質です!! 読者の皆様、お久しぶりです!!
今までずっと活動できなくてすいませんでした。

その間にいろいろとありまして、1文字すら打つこともできませんでした。

とりあえず今日このような形で復活させていただきましたが、当作品はどうでしたか?

当作品は、やっこのことで出すことのできた「マルクソウル」とカービィに戦ってもらいましたが、はっきり言いますとマルクソウルは本筋的に関係なかったです……。はい、すいませんでした……。

とりあえず、当作品投稿の翌日にゼロ復の最初の作品の投稿から1年を迎えます。

もちろん僕はここまで続くとは思っていませんでしたし、本当に読者の皆様にも感謝をしています。

読者の皆さん、本当にありがとうございました。

そして、今後ともよろしく願います。

では、今後のスケジュールです。

星のカービィ	ゼロの復讐劇ⅠⅤ	12月初旬に再開	12月末終了予定
星のカービィ	ゼロの復讐劇外伝	未定	
星のカービィ	ゼロの復讐劇Ω	未定	

では皆さん、これからもよろしく願います!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6535i/>

星のカービィ ゼロの復讐劇Ⅱ-2 ～戦友～

2010年10月9日18時29分発行